第四章　奇縁が結ぶ陳情活動

1　木曽川下流取水用水組合への説明会（昭和二十三年九月）

愛知用水の計画が新聞報道その他の形で報道されたり、評判になり、木曽川下流（犬山以下）取水の木津、宮田、羽島、佐屋川、筏川用水などから猛烈な反対陳情が愛知県農地部、農林省京都農地事務局名古屋建設部に出てきた。

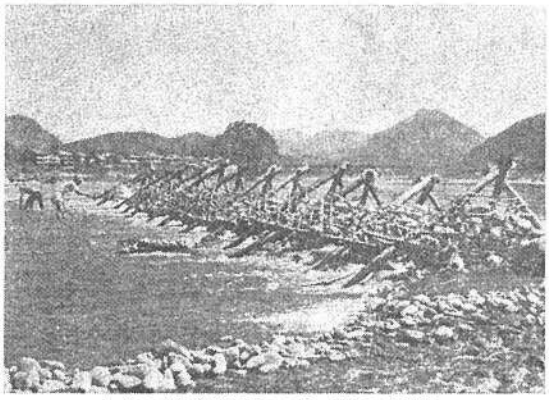
「われわれは尾張徳川様の昔から木曽川については『山川ともに御拝領』といって、木曽山、木曽川の水は尾張様からいただいたという御墨付を持っている。いま水がほしいといっても、木曽川の上流から一滴の水も取ることは許さない。最近は上流にダム式の発電所ができて、上流からの土砂の流出が少なくなったため、降雨のたびごとに河床が削られて水位が低くなり取水に苦労している。とくに春先のイノコ入れ[註1]、春から秋にかけての洪水のたびごとに行うイノコの補修は決死の作業である。今上流からの一滴の取水も許さない」

という陳情書が出てきている。そのため愛知県、農林省京都農地事務局も重大な関心を寄せて、愛知用水の計画がなくても、何らかの対策を講じなければならないと考えていた。

この状況を木曽川下流の研農会員、大口村の丹羽甚作から聞いた山崎延吉先生は、丹羽甚

作の仲介で、木曽川下流取水用水組合幹部に久野庄太郎さんを会わせ、愛知用水の計画を説明させる会を開くように依頼された。その結果、昭和二十三年九月中旬、木曽川下流取水用水組合幹部に愛知用水計画を説明する会を犬山の木曽川河畔紅葉館で、費用一切、久野庄太郎持ちで開くことになった。木曽川下流取水用水組合は、木津、宮田、羽島、佐屋川、筏川用水の幹部十名ほどに、仲介者の丹羽甚作、愛知用水側久野庄太郎、浜島辰雄の十数名の会であった。

当日は午前十一時頃、犬山の紅葉館の二階、木曽川が一望できる部屋で、まず丹羽甚作から、愛知用水側の久野庄太郎、浜島辰雄の紹介があり、丹羽甚作の立場と、いままでの経緯の説明があり、つづいて久野庄太郎の自己紹介のあと、知多半島の旱魃を救うには木曽川から用水をいただくしかない状態を説明し、


木曽本流導流堤工事（猪子伏込）

「昔から木曽川の水で農業を営む皆様方にご迷惑をかけてはいけないことは、同じ百姓の立場でよくわかっております。そこで、木曽川の上流にダムを建設して、雨水を貯水して、必要時にそのダムの水を取水して利用する計画でありまして」

と、例の地図を掲げて、もっぱら低姿勢でお願いした。説明はその頃連日連夜、用水地区を説明して廻っているので名調子であり、元来が話の旨い人がここを先途と話したので、皆さん聞きほれて、反撥の声も出なかった。

つづいて浜島が、軍隊での小牧在住以来の話から、掲

げている大地図の作成の由来を、久野さんの話についで、

「上流のダム建設は、河川工学の大家水谷将著の河水統制の説であり、これを受けて県土木部の岩塚斉（ひとし）の計画で、木曽川の上流の滝越、薮原、丸山などに四億立方メートルの水を貯溜して、木曽川の平均流量を一四〇立方メートルとし、現在の農業用水、工業用水、上水道用水など不足を生じないようにする計画であります。

また、ダム建設により、土砂の流出が少なくなり、河床が低下することは、洪水調節の立場からは安全方向でありますが、用水取水では困られる。そこで、現在の『イノコ』堤方式の取水を改良して、恒久構造物の近代的取水堰堤を構築して、各用水が合口して、なるべく高水位から取水して、用排水分離する計画にするという考えであります」

と説明したら、下流側の用水の役員の中から、

「そんなことはわかり切ったことだ、これから用水を造ろうとする若造が何をいうか。自分勝手な鳶が油揚げをさらうようなことを考えずに、自分達が人に迷惑を与えないことを考えろ」

と一喝喰わせられた。酒も入って話があちこちに飛んで、まとまりのない方向に流れて行った。中には浜島のところにやってきて、「今の話は本当だ、うちのように、河床がだんだん下って尻から水を吸うような用水系統は考えねばならぬ」とか、入れかわり酒を注がれて、断りもできず、ずいぶん飲まされた。「君は専門的なことを言うが、三重の土木（三重高等農林学校農業土木科卒の意）か」と言う人も出てきて、一時はどうなることかと思ったが、各用水組合とも、いろいろ内部事情があり、皆さんの日頃の苦労は大変だと思い、用水農民はどこまで行っても真剣で、また純真で、それぞれの立場を理解して、方策を立てなければなら

ないと考えた。

2　研農会員への報告会

昭和二十三年の秋も深くなって、久野庄太郎の浪曲つき愛知用水建設促進説明会も板についてきた。久野さんはここで一つ、山崎先生にお礼の意味を兼ねて、自分を励ましてくれている研農会の面々に、この説明会の様子を聞いてもらいたいと思って、次弟の分家が空き家となっているので、そこに集まってもらって、説明会の実況をやって、山崎先生はじめ研農会の同志にお礼を申したいと計画した。

当日、集まった面々は、五月五日に山崎邸での用水計画発表に立ち会った人が多く、その後、どのようになっているか、心配している面々ばかり。次のような人が集まったと記憶している。

山崎延吉先生、久野庄太郎、浜島辰雄、浪曲師梅ケ枝鶯（うめがえうぐいす）、同夫人（曲師）

大府町　山口治兵、加古与市

西浦町　谷川忠三、中野三一

内海町　大岩源平、石黒新三

河和町　冨谷茂吉

豊明村　三浦青一

篠岡村池ノ内　伊藤告重

浪曲師・梅ヶ江鶯と山崎延吉
先生筆になる浪曲用たれ幕

明治村西端　原田信治
常滑町　稲葉忠雄
東浦村森岡　水野源弍
二川町　小野田卓司（天白原高田）
高橋村　加藤[illegible]一
幸田村　平岩幸一
大口村　丹羽甚作
高岡村　太田一男
赤羽根村　田中武夫
吉良町　鎌田由一

久野庄太郎さんが遠来の皆様に足を運んでもらったお礼を述べ、いま盛んに各地区を浪曲をやりながら愛知用水の計画、効用などを話していると挨拶し、まず梅ヶ枝鶯の浪曲を始めた。曲がクライマックスに達し、都築彌厚翁が地域の住民が反対する中、夜、提灯の明かりで測量するあたりになって、高岡村竹の太田一男が男泣きに、おいおい泣き始めた。つづいて付近の一人、二人が涙にむせんで泣き出し、つづいて全員がおいおいと男泣きし始めた。みんな純な人ばかり。彌厚さんの苦心談に、久野庄太郎さんの苦心を思いやり、みんな泣いた。

そこで、さっそく金を出し合って絹布を買ってきて、山崎先生に梅に鶯の水墨画を描いていただいて曲幕を作って進呈した。報告会が、ついには久野庄太郎を励ます会になってしまった。

その曲幕は写真にあるもので、本物は愛知県庁の県の沢田権平が用水史編集の資料と一緒に保存したはずであるが、その所在がわからない。たしか県庁のどこかにあるはずである。

このように、連日連夜の愛知用水計画の説明会は感激の中に進められていった。

3　愛知用水建設期成会の設立

愛知用水建設期成会としての設立の決議が、去る昭和二十三年八月七日、武豊警察署において成立した。その後、同年十月一日、木曽川総合開発の一翼としての愛知用水事業計画がまとまり、各地域ごとの説明会も進んできたので、農村同志会が呱々の声を挙げた武豊の堀田稲荷において、各市町村長、またはその代理者、農村同志会の面々が集まって、規約、活動方針の確認がなされ、用水事業計画をも確認、これを愛知郡、東西春日井郡、名古屋市へと拡大し協力を求めることが決議された。

4　関係知多郡外市町村に対する陳情と説明

つづいて、会長半田市長森信蔵、副会長中川益平、常滑町長滝田次郎らが半田市長の車、西浦町長久田慶三の運転の車に久野庄太郎さん、浜島辰雄随行で、豊明村、東郷村、日進村、

長久手村、名古屋市などに計画書、規約を携行、挨拶に廻った。

田淵寿郎名古屋市助役の反対

名古屋市に対する協力依頼は、とくに重要と考え、塚本三（ぞう）市長に直接会って協力を依頼した。市長は「よくわかりました。名古屋市は建設については田淵助役に任せてあるから助役にも話して下さい」とのことであったので森半田市長はじめ関係町村長たちは先に帰り、久野さんと浜島の二人で田淵助役のところへ計画書を持って協力依頼に行った。田淵助役は、二人をつくづく眺め、

「とてもできることではないからやめときなさい。見れば、百姓、子供上がりではありませんか。とてもむりです。名古屋市としては協力できません」

と、てんで問題にされなかった。以来、愛知用水は運動期間中に名古屋市から協力援助を受けたことなし。名古屋市にとって愛知用水の効果は莫大なものであったはずである。田淵寿郎助役は後年、「あの時、私の言ったことは、一世一代の失言であった」と告白されたと聞いたが、われわれもあの時の言葉を一生忘れることはできない。

その元をただせば、昭和十年頃、愛知県知事篠原英太郎、内務省土木出張所長田淵寿郎、愛知県議会副議長奥村鉄三などと図って、薮原にダムを建設、名古屋上水道の補完、東尾張地区の農業用水を計画したが果たせなかった時の無念さが田淵助役の頭に残っていた結果の発言であったろう。

協力的な村と非協力的な村

愛知郡豊明村は浜島の誕生地であり、久野さんと三浦青一の関係もあり、村自体も溜池依存の土地でもあったので協力態勢は格別であった。

それに近かった東郷村も相羽村長、近藤眞夫農協組合長の協力もあり、のちほど東郷池建設の難問題も起こってきたが、終始、協力的であったのは、溜池、境川上流部の渓流取水の苦汁をなめてきていた結果と思う。

長久手村は当時、亜炭鉱採掘廃坑の落盤で、中学校の崩壊などの最中にもかかわらず、伊藤浜一、松原源六、加藤茂三郎氏などの厚い協力があったことは忘れてはならない。

日進村に関しては、協力は得難かったが、出原金造、元満鉄職員出原佃工学博士の先見の明の意見は異色であった。神野真龍天白村長は、時の農林大臣広川弘禅と学校が同期で、「用水造りは時代遅れだ。今や人工降雨の時代だ。雨がほしかったならば、雨の種を飛行機に積んで、雨のほしい所に行ってほしいだけまけば、ほしい所にほしいだけの雨が降る。用水造りは時代遅れだ。やめとけ、協力できない」という。これが愛知郡の町村会長だから手におえない。

鳴海町は郡唯一の町であったが、伝事山の未墾地の農地化を恐れて、愛知用水加入には反対であったが、野村町長のような良識のある町長が出てきたり、滝の水開拓地に入植していた久野一族のごとき強力な愛知

用水建設に反対する村もあった。二子持ダムサイト下流

用水加入賛成者もあり、必ずしも反対者ばかりではなかった。

猪高村は社会党加藤精二の実兄が村長で社会党色が強く、住宅化の希望が多いため、愛知用水には反対者が多かった。しかし、中には前村長柴田直一のように現農協組合長でもあり、反対者ばかりというわけでもなかったが、大勢は名古屋合併の気運が強く賛成を得ることはむずかしかった。

東春日井郡、瀬戸市への協力は次の段階となった。

5　愛知用水第一回東京陳情

農林省開拓局に対する陳情

農林省農地開拓局より、豊明村を通し、「年内十二月二十日以降、なるべくはやく、愛知用水の建設促進の陳情に上京せられたし」の連絡あり。愛知用水建設期成会の幹事会を開き、同時期の市町村長は年末多忙で上京はむりだというので、農村同志会で陳情することに決定。次のメンバーで上京した。旅費交通費は自弁。十二月二十二日、名古屋発午後十時。急行大和の二輌目に乗車。（あらかじめ席確保）

陳情団

団長　山口治兵（農村同志会会長、大府）　〔豊　浜〕　牛田与吉

〔大　府〕　加古与市、浜島辰雄　〔内　海〕　石黒新三

〔東　浦〕　水野源弍　〔豊　明〕　三浦青一

〔阿久比〕　山本孝平、岡戸嘉市　〔八　幡〕　久野庄太郎、緋田工

〔上　野〕　石田季之、近藤鍵次郎
山盛大和、小島正雄

〔小鈴谷〕　明壁京一

大府までに全員乗車。（席はがら空き）

阿久比の岡戸嘉市用意の岡戸正宗で乾盃、久しぶりで話がはずむ。今年の収穫のこと、浪曲のこと、用水建設の人気……。話は尽きない。静岡を過ぎる頃から静かになったと思ったら朝、東京着。寝ている間に、みんな機関車の吐く油煙でまっ黒、要領のよいのは、東京温泉で、さっぱりしているものもいた。最寄りの所で朝食をすまして、全員、予定の時刻に有楽町駅に集合し、例の大地図を先頭に、農林省開拓局、毎日ビル二階へ乗り込んだ。局長付斉藤秘書官の案内で左図のように席についた。

農林省側も予定の時刻に揃い、地図を掲げて話が始まった。

まず伊藤開拓局長が、今日に至ったまでの経緯を説明し、久野庄太郎が陳情団を代表して、陳情の主旨を述べて、浜島が例の地図について、計画の要旨の説明を始めた。すると、突然、農林省側の中から大きな声で「浜島！　てめい、偉いこと考えたなあ」と言う人があった。

陳情側も、陳情を受ける方も、みんなびっくりして、二人の顔を見て、「なんだ」「なんだ」ということになった。

夜汽車の疲れで眠り心地になっていた者も目を覚まして、きょろきょろ。

浜島は、あっといった顔で、「あ！　松田先生」と言って絶句した。

局長が、「進めて、進めて」と促して、浜島がわれに還って、上がり気味で計画の説明をした。

（愛知用水の地図を掲示）

○説明者

開拓局長　伊藤　佐
建設部長　溝口　三郎
計画部長　和田栄太郎
資源課長　伊藤　繁松
地質官　堀田　正弘
建設部次長　佐々木四郎
建設部専門官　松田　俊正
京都農地事務局　千葉　進
片山源之助
同専門官　赤堀　三郎
地質官　弘法　健三
斉藤小之助（秘書）

小机　小机　小机　小机

小机　小机　小机　小机

久野庄太郎
浜島　辰雄
緋田　工
山口　治兵
加古　与市
山本　孝平
岡戸　嘉市
三浦　青一
水野　源弐
近藤鍵次郎
石田　季之
山盛　大和
牛田　与吉
石黒　新三
小島　正雄

ここでちょっと説明すると、松田専門官は、昭和十三、四年頃、三重高等農林の農業土木担任教授であり、陸上競技部の監督教官であった。当時、浜島は中長距離の選手で、円盤投げの日本記録の保持者宮城栄仁（一年下）と二人で同じ下宿に住んでいて、毎日遅くまでまっ黒になって練習していたのを見て、口の悪い松田教授が親しみをこめて「印度坊主」とニックネームをつけて呼んでいた。いま十年の年月が過ぎて、思わぬ所で突然の再会ということになり、嬉しさと驚きで昔の言葉が飛び出してしまったのである。

このようなハプニングも、農林省側には、ほほ笑しく、興味深く聞いてもらって、好評裡に陳情も終わった。

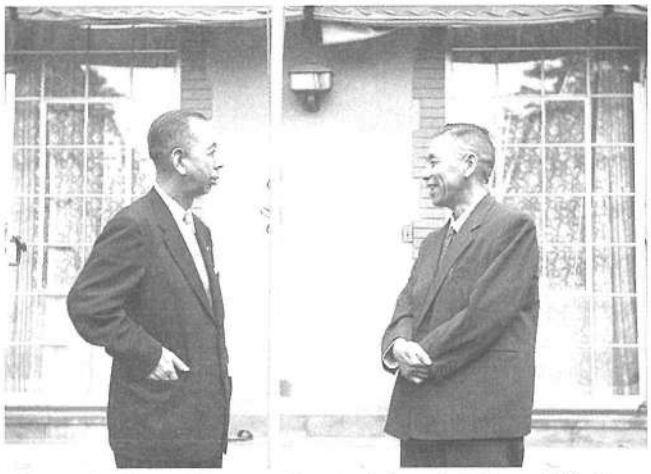
夜の開拓会館の懇親会にも、伊藤局長はじめ全員が喜んで出席してくれて、開拓局の人々とも一夜で親しくなり、溝口三郎建設部長の「三本木」もとび出して、全員心地よい一刻となった。

松田専門官にしても、教え子が夢のような計画を持ちこんでくれたことがよっぽど嬉しかったらしい。

その後、松田先生が幹水路計画担当となり、思うことが言えて、楽しい路線選定となった。
陳情団全員、開拓会館泊まり。農林省側のお客さんをお送りして、生涯忘れることのできない長い一日が終わった。

予期せぬ岸信介氏訪問

農林省側をお送りして一休みしていると、緋田氏が、「ちょっと、皆さん、集まって下さい」と言い、全員集まったところで、「今日の午後に得た警察情報ですが、昨晩、巣鴨において、A級戦犯の東条英機以下五名が絞首刑となり、無罪釈放となった岸信介さんが御殿場の自宅まで帰れずに、弟の佐藤栄作氏の家に泊まっていると聞き、事情を話したら、少人数の人なら会ってもよいと言うから、会いに行きたいと思いますが、いかがですか」と言った。「それでは、久野、浜島、緋田で会いに行く」ということになり、その他の方は、靖国神社、皇居、市内見物に元近衛兵の山本孝平、三浦青一が案内することになった。
翌朝、吉祥寺の佐藤邸に十時ということで、タクシーを頼み、例の地図を担いで出かけた。十時前に到着。
運転手には十一時に迎えに来るよう頼んで、佐藤邸を訪問した。
家は胸高生垣に囲まれた瀟洒な平屋建ての家で、廊下を通って、座敷に岸元商工大臣は一人座っておられた。緋田氏はよほど親しい仲であったらしく、まず出獄のお祝いの言葉を申し上げ、今般上京の理由を説明し、久野庄太郎さんが例の愛知用水の大地図を広げ説明を始めた。
聞き終えた岸さんは、



愛知用水建設の見通しが立ったあと、久野さんは首相になっていた岸信介氏（左）にお礼のあいさつにうかがった（昭和34年頃）

「私は巣鴨から出て来た翌日に、こういう国家的大事業の話を聞くのは、まことに幸せである。この話は私が聞くより、弟に話して下さい」

と弟を呼ばれた。私は弟が何者であるか知らなかった。間もなく唐紙を開けて現れた歌舞伎の団十郎ばりの偉丈夫は、吉田内閣の官房長官佐藤栄作氏であった。

改めて緋田氏より、それぞれを紹介し、久野さんは例の大地図を前にして説明を始めた。

一応の話を終わり、岸さんはつくづくと地図を見て、

「時にこの地図は伊勢湾の知多半島と思うが、戦争中に東海軍管区司令官陸軍中将岡田資（たすく）という人が、知多半島に住まっていた。彼はC級戦犯ですでに絞首刑となったが、実に立派な軍人であった。彼は戦争中、アメリカの爆撃機B29の空襲で撃墜された飛行機から落下傘で降りてきた米兵を虐殺した罪に問われたのであるが、その虐殺の命令は本官が出したもので、実際に虐殺を行った軍人や民間人には罪はなく、本官一人の罪であると平然として取り調べを受け、独房においても、毎晩高らかに法華経を誦じ、従容として刑死された。彼の家族は知多半島にいたはずだが、いまどうしたか心配している」

と言われた。

緋田氏が、

「そのことならご心配なく、戦中、戦後、この久野が岡田軍司令官の人柄に惚れて、いま

も生活の面倒を見ておりますのでご心配なく」

と言うと、あの冷徹無比と言われた岸さんの両眼から大粒の涙がこぼれ落ちて、

「そういう情け深い人の計画なら、私も心からご協力しましょう」

と言われた。

佐藤官房長官も、

「この話は私が聞くよりも総理に聞かして下さい。明朝十時に全員で総理官邸に来て下さい」

と言われ、久野さんは感激して、涙を流し、お礼を言って、明日を約束して佐藤邸を辞去し、待っていたタクシーで開拓会館に急ぎ帰った。

陳情団は、十二月二十四日は、三々五々、開拓会館に帰り、明日十時首相官邸で吉田総理大臣に直接陳情できることを聞いて、夢かとばかり喜んだ。その日は自粛して早く休んだ。

吉田茂総理大臣に直接陳情

翌十二月二十五日、久野、緋田の二人は先発して、山口治兵ほか十三名は、例の大地図を大風呂敷に包んで、十時前に首相官邸に急いだ。官邸の門衛は用件を聞いて、首相に直接会うためだと言うには服装はまちまちだし、議員もついていない。第一、大きな風呂敷に包んだ物の中身は何かと怪しんで、なかなか中に入れてくれない。「その棒は何だ」ときかれ、何だかんだと言っているうちに、官房長官から、早く来るよう催促があり、初めて中に入れてくれた。それとばかり、初めての赤絨毯（じゅうたん）を踏んで急いだ。恥ずかしながら、初めてのことだ。

吉田茂首相
（当時）

佐藤栄作内閣官房長官（当時）

首相の部屋の前まで行くと、北海道の議員を中心とした陳情団が一杯詰めかけていて、われわれの方が先だと怒声を交じえて、官房長官に食ってかかっている。その中を佐藤官房長官は片手を挙げて、「五分、五分、首相が待っております」と言って、われわれを中に入れてくれた。大きな部屋のまん中に大きな机が置いてあり、その正面に小さな人が腰をかけ、「ここに地図を拡げよ」と言っている。

「あっ、吉田総理だ」とさっそく地図を拡げて説明を始めた。久野さんは人が変わったように落ちついて、自信に満ちた顔で説明を始めた。

首相から「食糧の増産量は？　人夫はどれくらい使うか？」と次から次へと質問が出た。一応は地図に註書してあるので答えたが、久野さんをはじめ、緋田、三浦青一など、世慣れた人がうまく答えてくれた。

最後になって、吉田首相が大きな声で「食糧増産、失業対策、よいではないか」と言われて、ほっとした。その声が六十年たった今日も耳の底に残っている。ついに五分の約束が四十分にもなってしまった。出て来たら北海道の陳情団に怒られたこと！　佐藤官房長

初の東京陳情を大成功裡に終えた知多農村同志会代表
（首相官邸前にて）

官が「総理の質問が多くて、つい時間超過してしまいました」と、あやまってくれた。

あの四十分は、いまなお新鮮に私達の脳裡に残っている。

この陳情があって、農林省も昭和二十四年からの調査予算をつけるのにも自信をもって予算要求をすることができたと喜ばれた。ちなみに昭和二十四年より農林省は愛知用水に対する直轄調査予算をつけることができた。

〔註〕

イノコ→イヌノコ

木曽川や旧丹羽郡の用水路で、長く川仕事をしていた古老の説明によると、イノコはイヌノコであって、イノコと言うのは、一地方の方言か聞き違いであろう。

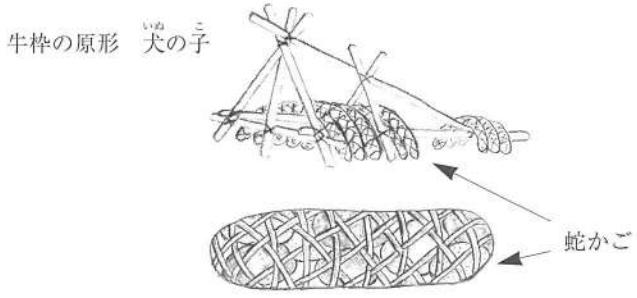
イヌノコは、導流堤を造るための資材として二つ股の生木（なまき）を切って、上下を逆さにした時の形が仔犬が坐った姿に似ているところから「イヌノコ」の名が付けられた。生木（なまき）以外の材料や導流堤の造成法も含めてイヌノコといわれ、伝承的な防水工法である。

竹で編んだ篭に石を入れた蛇篭、粗朶（そだ）、土嚢などを交互に積み上げて堤を作る。

大きさや造り方によって、「川倉」「鳥脚」「中聖牛」「笈牛」など、さまざまである。

出水によって流されたりして消耗度が高いので、毎年、水の少ない寒い時期に補修または築堤をしなければならないので、農民にとってはつらい作業だった。

（資料提供　山口明三）



庄川における川倉設置状況
（昭和９年ごろ）